

タイトル：怪奇占い

著者名：栗生深泥

あらすじ：栄華寺という廃寺に怨霊が出るという噂を知ったオカ研の茜先輩に連れられて僕は現地調査へと赴く。民俗学の視点から怪奇現象を解き明かそうとする茜だったが、二人の距離が縮まった途端、怨霊らしき存在に遭遇する。その後、茜が分析すると、怨霊はカップルが近づいたときに出没することがわかった。

本編の文字数：5,000字

「次の行先が決まったぞ！」

十二月初旬、古田茜先輩は龍溪大学のサークル棟の一番端の部屋で嬉々とした声をあげた。平和な時間の終わりにため息をつきたいのを我慢して、読んでいた雑誌から顔をあげた。修士一年生の茜先輩は、腰に手をあて、鼻息荒く僕を見ていた。

オカルト研究会の部室には僕と茜先輩の二人しかいない。集まりが悪いとかではなくて、元から二人しかいない。茜先輩の力でサークルとして認められているらしいけど、僕としてはそれが一番オカルトだ。

「静岡に栄華寺という場所があって、そこの池で怨霊が出るらしい。出没状況が安定しなくて取材に行くかどうか悩んでいたが、二人組で深夜に訪れると高確率で会えるようだ」

スマホで栄華寺の場所を調べてみると、静岡駅からレンタカーで一時間半ほどの場所にあるらしい。茜先輩の語る怨霊の噂も SNS を中心にちらほらと記事があった。

曰く、正体不明の生物が池から這い出てきて人間を池の中に引きずり込もうとするらしい。お決まりの怪奇現象だが、目撃報告がこのところ頻繁にアップされていた。

「ここしばらくは学会の準備で手が離せないから、年末付近になるが、まあ、寺だしちょうどいいだろう？」

「オカ研の取材を年末詣でと兼ねないでください。それに、年末年始は実家に帰るので」

「となると、お互いの都合がつくのは第四週の火曜日か」

「ああ、その日は特に予定入ってない——ごふっ！」

茜先輩の言葉にしたがってカレンダーを辿り、思わず噴き出してしまう。第四週の火曜日は十二月二十四日、クリスマスイブだった。寺よりも教会が似合うタイミングだ。まあ、茜先輩はそんな世間一般のイベントなど関係ないのだろうけど。

「どうかした？」

「いえ、別に。わかりました、じゃあ、レンタカーの予約しておきますね」

「ああ、頼む」

取材の予定が決まったからか、茜先輩が見るからに機嫌がよくなる。ふんふんと下手っぴな鼻歌まで聞こえてきた。クリスマスも念頭にないような茜先輩だけど、民族学界では一角の人物で、僕と同じ三年生の頃には既に論文を発表していた。

民俗学に興味があった僕は大学入学とともに茜先輩に憧れて、「弟子にしてほしい」と頼みに行き、連れてこられたのがこのオカ研だった。当時すでに茜先輩一人しかおらず、助手を探していたらしい。

「今回の取材もまた論文にするんですか？」

「結果次第だが、そのつもりだ」

オカ研の活動は茜先輩にとって趣味と実益を兼ねている。僕は茜先輩の研究を間近で見ることができるし、茜先輩は取材に必要な人手を確保できる。僕たちの関係はビジネスラ

イクで、ウィンウィンのはずだけど。

「ところで、二十四日ですけど。僕に予定が入ってる可能性は考えなかったんですか？」

栄華寺付近の地図を調べ始めた茜先輩に尋ねてみると、先輩はかわいらしく小首を傾げて純粋な視線を僕にぶつけてきた。

「どうしてだ？ 君の講義やバイトの予定は把握しているつもりだが」

「それはそれでどうかと思いますが、もういいです」

これ以上追及しても僕が傷ついて終わりそうだから、戦略的撤退を選ぶことにした。

*

レンタカーを一時間半運転して辿り着いた栄華寺は、その名前とは裏腹にすっかり寂れた山奥の寺院だった。正確には寺跡か。

既に廃寺となり、朽ちるに任せた深夜の寺院は一際不気味だった。三年間オカ研で茜先輩に連れまわされた経験がなければ、とっくに逃げ出していたかもしれない。

「しかし、こんな場所まで怪奇現象を見に来る人がいるなんて、物好きもいたものだな」

「茜先輩。鏡、持ってきましょうか？」

まさに今の僕たちが東京からわざわざ新幹線に乗って怪奇現象を見に来た物好きだ。しかも、僕たちの場合、クリスマスイブというおまけつきだ。まあ、そっちは廃寺や茜先輩には関係ない事情かもしれないけど。

「私たちらのはれっきとした調査活動だ。そこら辺の野次馬と一緒にしないでもらいたい」

茜先輩はちょっとムツとした様子で僕の言葉に反論するけど、僕は見てしまっていた。

「その割には、車の中でホテル周辺の深夜までやってる居酒屋探してましたよね」

「うっ。それはだな、万が一霊的なものに憑りつかれた時に、浄化する必要があると思っ
てあらかじめ……」

「先輩ってあれですか。風邪の時に飲み会に来て『アルコール消毒だ』とか言っちゃうタイプとか」

あんまりにもあんまりな言い訳に思わず突っ込んでしまう。この先輩、普通に酒に強いので、付き合わされるとクリスマス当日まで一日犠牲にしかねない。そもそも、憑りつかれたらという前提自体がおかしいのだけだ。

「だいたい、先輩。本当に霊が出るって考えてるわけじゃないですよ」

茜先輩は根っからのオカルトマニアというわけではなく、民俗学の延長でオカ研の活動をしている。取材も怖いもの見たさなどではなく、怪奇現象とその地に伝わる伝承や伝説の関係について検証し、論文としてまとめるためだった。

「まあね。栄華寺は室町時代後期に建立された寺だが、その建立の由来として『お栄』という女性の怨霊が出るという逸話が残っている」

「『お栄』ですか。どうしてまた怨霊に？」

「いくつか話のパターンはあるが、共通しているのは愛していたはずの夫に裏切られたという点だな。別の女と結ばれるために殺されて池に沈められたとか、流行り病に罹ったところを夫が治療と偽って寺に連れてきて、池に落として殺したといったところだ」

うわあ。淡々と語る茜先輩だったが、その内容に首筋が寒くなる。その手の話はいくつも聞いてきたけど、深夜の真っ暗な山中で聞くべきじゃなかった。

「ところが、廃寺になる前は『栄華寺』という名前もあって恋愛成就のスポットにもなっ

ていたらしい。池の中の『お栄』が聞いたら怒りそうだな」

対して、茜先輩は平気な様子で進んでいき、件の池にたどり着いた。

深夜の池は黒々としていて、ライトで照らし出すと辛うじてそこに水面があるとわかる具合だった。なんだか引きずり込まれそうな気味の悪さはあるが、それ以外に変わった様子はない。

「何もありませんね」

「まあ、そうだろうな。『お栄』の逸話にしたって、昨今の目撃談にしたって、全て視界の悪い深夜の話だ。大方、野生動物を怨霊と勘違いしたのだろう」

それはそれで、怨霊よりも野生動物の方が怖い気がする。

「それがわかってて、取材対象にしたんですか？」

推察を確かめるのも大事だけど、何時間もかけて取材に来る必要まであったのだろうか。「この時期に取材できそうな話がここしかなかったというのもあるが、どうして怪奇現象がここ最近話題になったかが気になってな」

「SNS でプチバズりしてるから、野次馬が集まってるんじゃないですか？」

「その発端、一番最初の人間はどうして深夜にこんな廃寺に来たのかがわからないんだ。この辺りの集落はすでに無くなっていて、お栄の逸話も文献を漁らなければ見つからなっ……きゃっ!？」

茜先輩の悲鳴とともにズザリと滑る音がして、慌てて手を伸ばす。僕の手を掴んだ茜先輩はその場にしりもちをつくと、注意深く足元を見ながら立ち上がった。

「すまない。池の淵が滑りやすくなっていたようだ」

茜先輩の足元をライトで照らしてみると、溜まった泥の上を滑った跡が残っていた。こんな場所が続いているなら、池の周りを歩くのは危ないかもしれない。

「君がいてくれてよかった。危うく新たな池の逸話をつくるどころだった」

「その冗談、笑えませんって」

「悪い。でも、君と一緒によかったと思っているのは本当だ」

深くにも茜先輩の言葉にドキリとする。握ったままの手だったり、どこか心細そうな表情だったり、普段はあまり気にしない女性としての茜先輩を意識してしまう。茜先輩も僕の手を離そうとはしなかった。灰かに先輩の頬が上気しているように見える。

「あ、茜先輩。あのっ」

——ズル、ズルズル……。

その瞬間、周囲に異音が生じた。泥の上を何かが這いずるような音。視界の先に何か大きな物体が池から出てくる様子が見えた。

「あ、慌てるな。おそらく猪か何か……」

茜先輩が僕の手を握る力が強くなる。おそらく、僕の手も同じことをしていると思う。

強い風が吹き、木々が揺れて葉が擦れる音がする。その音に紛れるように、人の言葉のようなものが聞こえてきた。

『愛……信……。殺……。恨……。』

言葉のようなものに紛れて、ズルズルと這いずるような音が大きくなる。臃気な影が少しずつ迫ってきている。その影との間に茜先輩がパッと立ちふさがった。

「私欲のために君をここまで連れてきたのは私だ。私が時間を稼ぐから、君は逃げろっ」

「何言ってるんですか！ 逃げますよ！ 一緒に！」

こんなところに茜先輩を一人置いて逃げられるはずもない。茜先輩の手をグイっと引く

と、先輩も我に返ったように頷いて、それまで来た山道を急いで降りる。

途中から何かが這いずる音も人の言葉のような声も聞こえなくなっていたけど、怖くて振り返ることのできないまま僕たちはレンタカーを停めた場所まで走り続けた。

*

十二月二十六日。オカ研の部室に顔を出したものの、二日酔いで頭がガンガンとする。二日前、静岡駅に戻った僕たちは除霊と称して茜先輩が目星をつけていた店で朝まで飲んだ。とてもじゃないけど、部屋で一人で眠れるような心境ではなかったから。

昨日は東京に戻ってきて少し落ち着いたので、疲労や酒のせいで気を失うように丸一日寝ってクリスマスが無駄にし、今日になってようやく動けるようになった。

「聞いてくれ！ 謎だった最初の怪奇現象の遭遇者だが、彼らは栄華寺が恋愛成就のスポットだったことを知っていたカップルだった。なるほど、お栄の話ではなく寺自体の方が目当てだったわけか」

僕が疲労と二日酔いで絶不調なのに対し、茜先輩は絶好調だった。そりゃあ、今までにない取材の成果が得られたのだから当然かもしれないけど、僕はしばらくの間は取材お断りの気分だ。結局、頼まれたら断り切れない自分も想像できてしまう。

「その投稿をきっかけに栄華寺を訪れる人間が増えたが、怪奇現象に遭遇するかどうかは半々といったところだった。その属性を普段のSNSの投稿などから調べたところ、遭遇したパターンのほとんどがカップルだったんだ！」

茜先輩が上機嫌で僕にリストを見せてくる。どうやらこの人は僕が疲労と二日酔いで動けないでいる中、着々と研究を進めていたらしい。体力気力共に化け物染みている。もっとも、僕たちは本物の化け物を見たのかもしれないけど。

「カップルと怪奇現象の間にいったいどんな関係があるのか。お栄の逸話も栄華寺の特徴も恋に関連するものが多いが、それが無意識化に影響を与えていたのか……うん、これは突き詰めると面白いテーマになりそうだ」

茜先輩はすっかり研究者の顔になっている。

だけど、それは、つまり。怨霊だか僕たちの無意識かはわからないけど、あの時の僕たちはカップル認定されたということだろうか。確かに手をつないでいたりはしたけど、それでカップル判定だとしたらずいぶん基準が緩いと思う。

クリスマスイブに訪れる男女なんてカップルに違いないと思われたのかもしれないが、そうだとしたらずいぶんハイカラな怨霊だ。まあ、茜先輩は気づいていないようだし、僕から触れることでもないだろう。僕たちの関係は、あくまでビジネスライクなもので。

「そうだ。一日遅れだけど、これ」

それまで研究者の顔で熱く語っていた茜先輩が、僅かに表情を変えて僕の前に丁寧にラッピングされた箱を置く。

「なんですか、これ？」

「メリークリスマスだよ。君にはいつもお世話になっているからね」

そう言って茜先輩が不器用なウインクをして僕に背を向けた。まさか、茜先輩にクリスマスというイベントが存在しているなんて。

そこでふと思出す。あのとき茜先輩は「私欲のため」と言っていたけど、私欲とは何だったんだろう。

もしも、茜先輩は初めから全てわかって僕を取材に誘ったのだとしたら。

なんのため？

例えば、怪奇現象を花占いの代わりに使ったのだとしたら、それはとても——茜先輩らしいと思った。

「茜先輩」

「うん？」

「メリークリスマスです。それから、来年もよろしくお願いします」

「来年だけでは困ってしまうな。私の研究にはもう君が欠かせない」

振り返ってはにかんで見せた茜先輩に思わず心が弾むのを感じながら、深夜にお騒がせしたお栄の怨霊に心の中でお詫びした。